

道 -ROAD-

大阪学芸中等教育学校
校長室だより

17 期生 103 名の巣立ち

日ごとに暖かさが増し、各地から梅開花の便りが聞かれます。「三寒四温」を繰り返しながら春の到来を告げるころとなりました。いよいよ来週の 6 日(火)から 5 日間、学年末考査が実施されます。2 学期末考査が終わってから期間が長かったので、科目によってはテスト範囲が広くなり、対策に四苦八苦している人もいるでしょう。集中力を持ち、時間を十分かけながら家庭学習に励んでください。

『後悔先に立たず』という言葉があるように、「あきらめずにやりぬく気持ち」を今こそ発揮してください。全員が気持ちよく次の学年に進級し、また新たな次の目標に向かってスタートが切れるよう、皆さんの奮起を期待しています。

さて、3 月 1 日(水)に第 17 回卒業式を挙行了しました。6 年間の思い出を胸に 17 期生 103 名が学び舎を巣立っていきました。思いを込めた校歌斉唱の後、生徒一人一人に卒業証書を授与いたしました。緊張した面持ちながら、壇上で卒業証書を受け取る卒業生の目を見ているとこれから頑張るぞという決意が感じられ頼もしく思いました。17 期生の今後の活躍を期待しています。

以下に、私が卒業生に話をした「式辞」を掲載(一部省略)しました。ぜひお読みください。

式 辞 (一部抜粋)

今日の卒業式は、人生の一つの大きな節目であり、新しいスタートラインに立つ、記念すべき日です。希望あふれる未来へ新たな一步をふみ出す皆さんに期待することを 2 つ話したいと思います。

まず第一に「あきらめない強い意志を持ち行動する」ことです。

今、時代はあらゆる分野で急激な進歩・発展を成し遂げており、成長社会から成熟社会へと大きく変化しています。人工知能、AI 技術の発展により、人間にしかできない新しい発想や価値を生む以外の仕事はロボットに奪われる可能性があり、今後 20 年程度で今ある仕事の半分は無くなるといわれています。時代の変化を敏感に感じ取ることが今後の企業の生き残りの条件で、求められる人材についても「マニュアル型人間」でなく、「状況の変化に即応し主体的に行動できる人間」へと変化しています。さらには、グローバルな視点を持ち、人類の持続可能な発展につながる発見や技術など、新しい価値を生み出すことのできる人材が求められています。

そのような時代に皆さんは確実に生きていかなければなりません。不安に思うかもしれませんが、このような時代だからこそ夢や目標をしっかりと持つべきなのです。

将来自分はこうなりたいという目標を立て、日々努力することで自分の成長につなげてください。すぐに結果が出なくてもいい、何年かかってもいい。自分以外の人あまりそのことを知らないかもしれない。でも、地道に努力することで、今まで自分が気づかなかった新たな長所や能力を発見することに繋がっていくでしょう。

さて、記憶に新しい平昌オリンピックでの日本選手の活躍に心を動かされた人も多いのではないのでしょうか。冬季オリンピックでは史上最多の13個のメダルを獲得しました。

メダルラッシュにわいた女子スピードスケート、その中で特に心に強く残るのは、団体追い抜き、パシュートの金メダルです。日本チームの基本は3選手がワンラインの隊列を崩さないことです。一糸乱れぬ動きを研ぎ澄まし、空気抵抗を最小限にする技術で他のチームをしのぎ、決勝ではスケート王国オランダの牙城を崩しました。個人の力では劣るが、チームの組織力でつかんだ栄光です。大きな怪我や代表落選などの葛藤を乗り越え、強い意志で練習を積み重ねてきた成果だと思います。

皆さんは、これから一生懸命やってもうまくいかないこともあるでしょう。大事なことは、その時に、誰かのせいにして、何かのせいにしてしないことです。自分自身をしっかり振り返り自らの力で前を向いて歩み出すことが大切です。

努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語ります。

皆さんも、自らの夢実現のために、あきらめない「強い意志」を持ち続けてください。

次に「共に助け合って生きていく」ことです。

皆さんは、大阪の生んだ国民的な歴史小説家の司馬遼太郎さんを知っていると思いますが、『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など多くの著作を残しました。司馬遼太郎さんが「一編の小説を書くより苦勞した」と語った『21世紀に生きる君たちへ』という本があります。初めて子ども向けに書いた随筆です。30年近く前に執筆されましたが、人間が社会を営んでいくうえで大切にすべき事柄が、簡潔で美しい文章にまとめられています。その一部を紹介します。

『君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。——自分に厳しく、相手にはやさしく。という自己を。自己といっても、自己中心におちいつてはならない。21世紀においては、特にそのことが重要である。』

人間は、助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。斜めの画がたがいに支え合って、構成されているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、助け合うということが、人間にとって大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のもとのものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。』

このエッセイは、子どもたちに向けての力強いメッセージで、人として生きていく上で大切にしなければならないものを改めて考えさせられます。人が共に助け合って生きる社会を実現する第1歩は、自分自身をかけがえのない大切な存在なのだというをしっかりと認識することです。そして、お互いの違いや良さを認め合い、支えあう気持ちが大切です。共に生きると書く「共生」という言葉は、高齢化、国際化が進むこれからの時代の重要なキーワードになると思います。皆さん一人一人が、この地球上でただ一人のかけがえのない存在であり、自分と同じように相手を尊重し、「思いやりの心」を忘れず共に生きていこうとする姿勢を持ち続けて欲しいと思います。
